

第1回がんに関する普及啓発懇談会議事録

日 時:平成 20 年 10 月 24 日(金)9:30～11:26

場 所:虎ノ門パストラル 新館5階 ミモザ

1. 開 会
2. 渡辺副大臣挨拶
3. 委員等の紹介
4. 座長の選任
5. 議 題
 - ① がん対策の現状について
 - ② 今後の進め方について
 - ③ その他
6. 閉 会



はじめに

■前田室長 それでは、定刻となりましたので、ただいまより、第1回「がんに関する普及啓発懇談会」を開催いたします。

委員の皆様方におかれましては、お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

私は、厚生労働省健康局総務課がん対策推進室長の前田でございます。本懇談会の座長が選出されるまでの間、司会進行をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、渡辺厚生労働副大臣からごあいさつ申し上げる予定となっておりますが、国会用務のため、遅れて到着するとご連絡がございましたので、到着次第、ごあいさつ申し上げたいと存じます。どうか御了承いただきますようお願いいたします。

また、傍聴の皆様方におかれましては、あらかじめお渡しいたしております注意事項の遵守をお願いいたします。

本日は、会議の冒頭の部分、そして渡辺厚生労働副大臣のあいさつのときにカメラ撮影が可能となっておりますので、御了承をお願いいたします。

メンバー紹介

まず、本日お集まりのメンバーの方々を御紹介させていただきたいと存じます。なお、自己紹介につきましては、後ほどお時間をとらせていただいて、御紹介させていただきたいと存じますので、ここではお名前の御紹介にとどめさせていただきます。

本日の資料の2ページ目にメンバー表という形で掲載されてございますが、この順に御紹介をさせていただきます。

特定非営利活動法人グループ・ネクサス理事長の天野慎介委員でございます。

東京大学大学院教育学研究科健康教育学教授の衛藤隆委員でございます。

社団法人日本広告業協会専務理事の兼坂紀治委員でございます。

財団法人日本対がん協会理事・事務局長の塩見知司委員でございます。

アフラック営業教育部がん保険推進課長の永江美保子委員でございます。

東京大学医学部附属病院准教授、緩和ケア診療部長の中川恵一委員でございます。

タレントの山田邦子委員でございます。

国立がんセンターがん対策情報センターセンター長補佐の若尾文彦委員でございます。

なお、本日、元日本テレビアナウンサーの関谷委員におかれましては、どうしても外せない御予定があるということで、御欠席との連絡をいただいております。

9名の委員の方のうち、8名の方々にお集まりいただいている次第でございます。

続きまして、事務局の紹介をさせていただきます。

厚生労働省健康局長の上田でございます。

厚生労働省大臣官房審議官(がん対策担当、国際感染症担当)の安達でございます。
また、本日は、がんに関する教育などで関連のある文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課の高山専門官に御出席いただいております。

座長の選出

それでは、次に、座長の選出に移りたいと存じます。

事務局といたしましては、がん対策推進協議会の委員であり、『がんのひみつ』『がんの教科書』などの著書により、がんについてわかりやすいPRに努められています、東京大学医学部附属病院の中川委員を座長に推薦いたしたいと思いますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

■前田室長 ありがとうございます。

それでは、座長を中川委員にお願いいたしたいと思います。座長席を用意いたしてございますので、お手数ですが、御移動願えますでしょうか。

(中川委員、座長席へ移動)

■前田室長 それでは、中川座長に以後の進行をお願いいたしたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

中川座長より一言 ～ざっくばらんな会にできれば～



■中川座長 皆さん、おはようございます。御苦勞様です。御指名いただきました中川でございます。僭越ですが、座長をさせていただきます。

この懇談会は、実は日本が世界一のがん大国であるにもかかわらず、なかなか日本人ががんのことをわからない、もっと言うとわからうとしない。この辺りをできるだけやさしく、啓発したい。いや、啓発という言葉自体難しいですね。わかっていただきたい。ですから、ざっくばらんな会にできればと思っています。今回も、私のざっくばらん性が買われたと思っていますので、そのようにさせていただきます。

私は、がん対策推進協議会という協議会のメンバーでもあるんですが、そこでは「何とか委員」と言うんですが、山田委員と言うのもちょっとあれなので、こういう会では「山田さん」、衛藤先生も「衛藤さん」と呼ばせていただこうと思いますが、よろしいでしょうか。

(「はい」と声あり)

■中川座長 では、そのようにさせていただきます。

リラックス、砕けたというと、この中ではどうしても山田さんだと思いますが、ざっくばらんな決意を少しお願いできませんか。



■山田委員 いきなりですか。それでは、おはようございます。よろしく願いいたします。雨になってしまいましたね。

もう皆さん御存じだと思いますけれども、私、去年から乳がんということで、ピンクリボンの仲間入りをさせていただきました。何も、全部早期発見・早期治療だったものですから、ここまでいろいろな方々に支えられつつも、こんなに元気になりました。多分神様がこんなうるさい人間を選んだんだと思います。こうやってうるさい人間が乳がんになりますと、乳がんは恐ろしいぞ、そのかわり、早期発見であれば 99%は死なないぞなどということをテレビや、

それから、今日も仙台の方にピンクリボンのウォークラリーでまた出かけるということで、非常に人生も変わりました。でも、プロフィールに「乳がん」という言葉が入ったということで、一生懸命使命感を持って頑張っておりますので、早期発見というのが私の言えることで、これをずっと言い続けていきたいなと思っています。

こういう難しい会は初めて参加させていただきますので、ちょっととんちんかな意見も言うかもしれませんが、中川先生にもついて行きたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

■中川座長 ありがとうございます。もうこれでざっくばらんな会になることは保障されたようなものですね。(笑い)

それでは、最初に事務局から、資料の確認をお願いいたします。

資料の確認

■前田室長 それでは、事務局提出資料といたしまして、まず座席表と議事次第。

事務局作成資料といたしまして、資料1が「がんに関する普及啓発懇談会開催要綱」。

資料2が「がんに対する普及啓発懇談会メンバー名簿」。

資料3が「がんに関する統計」。

資料4が「がん対策基本法の概要」。

資料5が「がん対策推進基本計画の概要」。

資料6が「平成 21 年度予算概算要求資料(PR版及びがん検診関連)」。

資料7が「がん対策に関する世論調査」。

資料8が「第3回乳がんに関する2万人女性の意識調査」。

資料9が「平成 19 年国民生活基礎調査の概要」。

資料 10 が「学校教育におけるがん知識の取り扱いの現状報告」という、文部科学省さんからの提出資料でございます。

以上が、事務局作成資料として1冊にまとめてございます。

また、本懇談会に委員の方々より提出いただきました資料といたしまして、中川委員から、資料 11-1として『毎日新聞』の「ドクター中川のがんを知る」の切り抜き。それから『がんのひみつ』の小冊子でございます。傍聴席の方には、コピーで入れてございます。

若尾委員からは、資料 11-2として「がんに関する普及啓発事業の実施状況報告」でございます。

衛藤委員からは、資料 11-3として「たばこの煙から子どもたちを守るには」という白い大きな冊子でございます。こちらも傍聴の方々には、コピーで配付させていただいてございます。

あと「がん対策推進基本計画」という白い冊子と、国立がんセンターがん対策情報センターが発行している「相談支援センターにご相談ください」という冊子、「がん情報さがしの 10 カ条」と、財団法人日本対がん協会御案内がございます。

以上が資料でございます。資料の不足がございましたら、お申し出いただきたいと思っております。

では、ここで一旦カメラ撮りは終了とさせていただきますので、御協力のほど、よろしくお願いいたします。

なお、先ほど申し上げましたとおり、渡辺副大臣からのあいさつが予定されております。その部分については、またカメラによる撮影は可能となりますので、そのタイミングにつきましては、別途御案内をさせていただきます。

それでは、中川座長、よろしくお願いいたします。

懇談会の趣旨などについて

■中川座長 それでは、議題に入ります前に、今回初めて開催される懇談会ということもございますので、事務局から、懇談会の趣旨などについて簡単に御説明していただきたいと思っております。

■前田室長 では、資料1と2に基づきまして、説明をさせていただきます。

先ほども御紹介がございましたが、平成 19 年 6 月に閣議決定されましたがん対策推進基本計画におきまして、この資料で申し上げますと、8 ページ目にその概要が掲載されてございます。これも非常に多岐にわたるがん対策についての協議会の方々の御意見を踏まえた計画で、閣議決定が昨年 6 月にされておりますが、この 8 ページの「2 基本方針」の 1 つ目に「『がん患者を含めた国民』の視点に立ったがん対策の実施」ということが大きな方針となっております。この方針を基に、がんの医療ですとか、がんの医療機関の整備、情報提供、がん登録、がんの予防、早期発見、がん研究といったものの個別な具体策を進めていくということになってございます。

今後、がん対策を進めるに当たりましては、こういったがんについての正しい理解の促進を図ることが、この個別の 7 つの施策に共通する重要かつ不可欠な視点であると考えてございます。

厚生労働大臣を本部長といたしますがん対策推進本部で、来年度から、がん検診受診率 50% に向けた施策を本格的に展開しようということで考えてございます。そして、がんの病態、治療法に対する正しい理解の普及啓発などが重要でございますが、がん検診の受診率は、また後ほど説明申し上げますが、46 ページの横表にございますように、乳がんが 20.3%、子宮がんが

21.3%、一番高い胃がんの男性でも32.5%ということで、まだまだ低い状況にございます。

このことは、まだがんに対する正しい理解が十分ではないのではないかと考えてございますので、正しい理解の普及啓発は、非常重要的な課題ということでございまして、がんの病態、検診の重要性、がん登録、緩和ケアについての正しい理解の普及啓発のための方策として、ここは検討するというふうに考えてございますが、碎けて言いますと、いろんな取組みを行われている方々の説明を伺っていただいて、それについてコメントをいただくとともに、有効かつ的確な普及啓発事業を実施する会議として、厚生労働健康局長が開催するものでございます。そして名称が「がんに関する普及啓発懇談会」ということでございます。

委員は、2ページ目でございます。

この人選につきましても、いろいろと検討いたしました次第でございますが、がん患者を含めた国民目線で御発言いただけるメンバーの方。医療、教育、広告などについての有識者といえますか、いろんな御経験なり、学問的な裏付けを持って御発言いただける方。そして、実際にがんの普及啓発を現在行っておられる方。そういった方々の中から、この9名の方々を選ばせていただいた次第でございます。

以上でございます。

自己紹介

■中川座長 ありがとうございます。

それでは、委員の先生方に、今日は第1回目ということもありますので、本当に申し訳ないんですが、簡単に自己紹介を3分ぐらいでお願いしたいと思います。私は最後に皆さんの意見を聞いて少しお話しさせていただきますので、名簿順に天野さんからお願いします。

天野委員



■天野委員 御紹介に預かりました、特定非営利活動法人グループ・ネクサス理事長の天野慎介と申します。よろしく願いいたします。

グループ・ネクサスは、リンパ腫の全国患者団体でございまして、私自身もリンパ腫の患者でございまして、山田委員と同じがん友と言えるかと思えます。

本日、この場に座らせていただくに当たりまして、多くのがん患者さんや御家族の皆様の、時には命を削るような御尽力があつて、こういった厚労省の会議に私が一委員として座らせていただいているということで、この場で改めて、そういったがんの患者さんや御家族の皆様に敬意を表させていただきたいと思えます。

私どもの会の名前は「グループ・ネクサス」という名前でございます。「ネクサス」というのは、英

単語で「つながり」という意味なんです、この患者団体の名前を決める際に、いろいろな意見が患者さん、御家族の方々から出ました。ただ、皆様、会の名前に「がん」という病名を入れるのだけはやめましょうということだけは一致していたんです。

なぜかといいますと、例えば地方によっては、がんであるということを公にすると、職業的な差別を受けてしまうような場合もあると聞きます。また、山田委員の乳がんということでありまして、例えば幼稚園とか小学校とかで、お母さん同士で乳がんであるということをお願い。子どもにもなかなか説明できないといった風潮が現実としてあるわけがございます。こういった風潮がある限りは、少なくとも会議の冒頭にありましたがんの検診、もしくは普及啓発ということが十分進んでいかないのではないかと考えておりますので、こういったイメージの払拭ということがひとつ大切かと考えております。

もう一つ、イメージのみならず、実際にそういった早期発見、検診というものが、がんの治療成績の向上、がんの検診の向上につながるんだという科学的な根拠に基づいた説明も同時に必要かと思っておりますので、そういった面でも、こういった会議で十分に検討することができればと考えています。よろしくお願いいたします。

■中川座長 3人に1人ぐらい失業しているんですね。

■天野委員 そうですね。

■中川座長 すごく大事な問題ですね。

それでは、衛藤さん、よろしくお願いいたします。

衛藤委員



■衛藤委員 東京大学の教育学部で健康教育の教授をしている衛藤と申します。私は、二十数年ぐらい前に、座長の中川さんがお勤めの病院で小児科医として勤めておりました。その時代、肝臓のがんにつながるB型肝炎というウイルスをどうやって予防するかといった小児科の立場から、母子感染予防の夜明け前の時代の研究をしております、これは昭和60年度から、B型肝炎母子感染防止事業という事業になりまして、お陰様で大変成果を上げていて、臨床医としては、患者さんがすごく減ってしまったということがあるんですが、これはとてもいいことだと思います。若い年代のB型肝炎のウイルスを持っている人は、非常に減っております。

そういったことで、私はその後、予防の方に関心を持ちまして、母子保健とか、学校保健の分野の研究をしております。ここ数十年ほどは、主として学校教育、特に健康教育に関わるような研究であるとか、あるいは文部科学省さんとの連携でいろいろな仕事をしております。どうかよろしくお願いいたします。

■中川座長 ありがとうございます。

兼坂さん、お願いします。

兼坂委員

■兼坂委員 日本広告業協会の兼坂でございます。

日本広告業協会というのは、東京中心なんですけれども、大手、中堅の広告会社 161 社の集まりの団体でございます。それと併せて、23 都道府県に 25 の広告業団体というのがございますが、その連絡会の専務理事も務めております。

私事になりますが、先日、中川先生からお送りいただいた資料を見て、がんの検診率の低さに愕然としたことが印象です。東京の広告業の保険組合ですと、大体 71%ぐらいの受診率です。もともと私は今年の春までは電通にいたんですけれども、そこではほぼ 99%の受診率で、年間がんで亡くなっている方が2、3名ぐらいの規模になっていますので、受診率の低さは意外というか、少なくとも5割ぐらいまではいっているのかなと思っていました。

もう一点、私的なことですが、私は6人兄弟の一番末っ子でございます。一番上の姉が 25 年ほど前に大腸がんで、一時人工肛門にして、今はまた接続をしてという形で、早い段階で見つけて手術をしたから治ったという形になっています。ただ、残念ながら3番目の姉は肝臓がんで、発見自体が非常に遅れたということ、進行の早いタイプのがんで、発見から3か月後に亡くなってしまいました。

身内にそういう経験も持っておりますが、ただ、がんについての知識は余りないので、今後いろいろと勉強させていただきますが、この場では、広告・広報の代表として、普及啓蒙のためにどうしていったらいいかということについて、意見を述べさせていただきたいと思っております。

■中川座長 ありがとうございます。

塩見さん、お願いします。

塩見委員



■塩見委員 日本対がん協会の塩見でございます。対がん協会のことを御存じない方も大勢いらっしゃると思いますが、50 年前に設立いたしました。がん死半減をスローガンに 50 年間闘ってまいりました。

本部と 46 道府県に支部がございまして、本部では普及啓発活動をやっております。テレビ、新聞等を通じた広報活動、例えばACの公共広告機構のコマーシャル。これは山田邦子さんに今年はお登場願っています。あるいは印刷物、出版物、イベントがございまして。がんのセミナー、講演会、シンポジウム、ピンクリボン運動などです。ピンクリボンは、東京、神戸、仙台で、これも山田さんに御出席願いますが、明日仙台で乳がんに関するフェスティバルを実施しま

す。そういう普及啓発活動をやってきました。

支部では検診です。やはりがん検診をやらなければいけないということで、検診による早期発見、早期治療が非常に重要だということでやっておりまして、今、年間支部で請負っている検診者数は1,200万人ぐらいです。50年でざっと累計しますと2億6,000万強の検診を終えました。その中で2万数千人のがんを発見しているというところでございますが、先ほどもお話がございましたように、なかなか検診受診率は上がらないですね。住民検診でいきますと、乳がんで20%前後ですから、この受診率を国の計画であります50%以上に上げないといけない。欧米などは70%、80%という受診率です。先ほど日本のがん死者が多いといいましたが、人口に占める割合は2%なのに、がん死者は4%であるということもありますから、日本は圧倒的にがん死者が多いわけです。受診率を向上させて、早期発見をして、早期治療をすれば治る機会も多いし、がん死が減るということでございますので、皆様のご協力をお願いしたいと思います。

それから、この会では、かなり早く効果のあるものを遂行していかなければいけないのではないかと考えています。例えば子宮頸がんのワクチンというのは、来年の秋ごろには認可されようとしておりますが、日本はかなり遅れております。このワクチンについては今年のUICC、国際対がん連合の会議でも話題になりました。また、今年のノーベル賞の医学生理学賞は、ツアハウゼン博士という子宮頸がんのヒトパピローマウイルスのワクチンを発見された方です。そういうふうな話題になっておりまして、これを導入していけば、70%ぐらい予防できるのではないのでしょうか。検診も含めると、恐らく100%に近い数字になりまして、がんの予防ができるということになりますね。その辺も含めて、皆様とここで議論をしていきたいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

■中川座長 ありがとうございます。

では、永江さんお願いします。

永江委員



■永江委員 改めまして、アフラックの永江でございます。よろしくお願いたします。

御承知の方も多いかと思いますが、私どものアフラックは、34年前、日本に初めてがん保険というものをもたらした、がん保険のパイオニアの会社でございます。当時、昭和49年、今とは全く異なる時代背景がございまして、今でこそ、中川先生もよくおっしゃっていますが、2人に1人はがんにかかる、しかもそのうち2人に1人は克服できるということで、お医者様が御本人に病名を告知されるのも普通になってきているのですが、当時はやはり治らない病気とか死の病というイメージで、そんな中で「がん保険」というものを普及することは、非常に難しかったです。

なので、私どもは、がん保険の販売をしている会社なのですが、創業以来やってきたことは、がん保険の販売というよりは、むしろがんという病気はほかの病気とは違ってどういったものなの

か、どういう恐ろしさを持っていて、それに見舞われた患者さんや御家族の方がどういう思いをされるかということを経験する、普及啓発ということを基本動作として、ずっと活動してきた会社でございます。ですから、まさに今回の趣旨と合致するところでは。

会社として発しているメッセージなんですけど、まず、がんはかからないことが一番です。ですから、予防の情報活動も必要ですし、また、それでも2人に1人はかかる時代ですので、やはり早く見つけて、適切な治療をする。ただ、その予防についても、早期発見についても、適切な治療についても、やはり情報ですね。知らなければ、何もできないということで、そのために、日本の社会への貢献として、情報伝達をしていくということは、私たちが努めております。

また、がん保険の販売のほかに、がんで親御さんを亡くされたお子さんのための奨学金の制度ですとか、小児がんですね。お子様自体ががんにかかった場合の支援です。ゴールドリボン活動です。山田さんはピンクリボンをされていますが、なかなか注目されない、支援者も少ないゴールドリボンの活動を私どもはやっております。

今回参加させていただいて、たいへん光栄に思っていますけれども、我々もずっとこの普及啓発という活動をしていて、やはり国としてこういうことを取り上げていただくことは、日本にとってよいことだと思います。非常に力強いといえますか。なので、ここにいらっしゃる皆さんの力を合わせて、1人でも多くの日本人の方にがんを知っていただくことを進められればと思います。よろしくお願いいたします。

■中川座長 ありがとうございます。

では、山田さん、お願いします。

山田委員



■山田委員 そうなんです。がん保険に入っていて、よかったです。

入ったときは、芸能人ですから、遠い親戚とか、知らない友達だという人から、入れ入れと言われて、こんなものは何かと思ったんですけれども、いざなったときには、本当に保険に助けられたなと思ったりしました。

それで、検診率が低いということにがっかりしますね。これだけ毎日毎日、本当に私は人生が変わって、啓蒙活動、啓発活動などいろいろと大切なんだよ、検診に行った方がいいんだよと、テレビ、ラジオ、イベントをいろいろやっているにもかかわらず、まだ行っていない人がいるんだと思うと、がっかりするわけでございますけれども、いろいろと勉強になりました。イベントやトークショーや講演などをしますと、自分の意見も固まってきますし、勉強もしますし、本も読みます。皆さんから今、意見がありましたけれども、日本人は今、2分の1、2人に1人が何かしらのがんにかかるということです。まさかというこの私は1回も病気をしたことがありませんで、初めてなった病気ががんでし

た。これはびっくりしましたけれども、こういう時代がきているわけで、ここに今日、お集まりの皆さんも、半分ががんということですから、ここから割ってこちら側がみんながんなんです。そういう割り方が嫌だったら、こちら側の方がみんながんとかね。そういうことを考えると、がん＝死というのは、芸能界は悪いと思います。本当にうちの事務所も、がんになったときに言うなと言いました。古い考え方なんです。がんの人はもう仕事来ない、あるいはがんでなくても、病気になると病気というレッテルを張られるので、明るい役来ない。そんなことを言ったら、日本中の半分が暗くなってしまいます。満員電車に乗ったときに、この半分はがんか、あるいはディズニーランドでミッキーと騒いでいる半分ががんかと、いろいろ考え方も変わりました。みんな背負いながらも、明るく元気に暮らしているわけで、そのために職業を追われて変わったりすることがないようにしたいなと思います。私はそれを明るく、イメージを変えていきたいなという役割でやっていきたいと思います。

働く女の人、それからお母さん、特に女性というのは、頑張っているわけで、自分のことは二の次になるんです。それとか、病んでいることを恥ずかしいと思って言わなかったり、子どもたちもお家の人も、まさかお母さんとは思っている。でも、そうではない。検診に行くと、がんとわかって、かなりステージが進んでいても、今は医療が進んでいますから、今日駄目でも、明日絶対助かる。そういうことを思って、明るくやっていく。イメージを変えていくことをやりたいと思っています。

それから企業も、大きな企業は 100%検診に行くことを義務づける。それから、小さい企業でも、町単位でも、学校単位でも、何か検診をしたら得点を付ける。優良学校であるとか、優良企業であるとか、何かえらいねとみんなで言ってあげるとかね。

私は、芸能人ばかりががん友を集めて、スター混声合唱団というのを細々と始めましたけれども、なかなか知名度抜群で、歌唱力は二の次なんですけれども、いろいろと全国で頑張っていています。例えばそういうチームがいて、その企業を応援するコンサートを開くとか、えらいですね、検診率が 100%でしたねとか、そういうこともやっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

■中川座長 山田さんに委員になってもらって、本当によかったですね。この会の方向性が見えた気がします。

山田さん御自身は、乳がん検診はなさっていたんですか。

■山田委員 やっていたんです。実は祖母が乳がんで、昔のやり方ですから、背中までざっぱり切るような手術を小さいときに見ていましたから、お前は遺伝だから乳がんになるよと言われていたので、随分大きくなってからは、本当に検診に行っていたんです。ところが、3年。これが魔ですね。先生が替わってしまって、去年行かなかったから、今年に行かなければいけないなというときにです。ですから、この3年の間にめきめきと頭角を現してきたのが乳がんです。

ただ、乳がんは勉強になりました。しこりがあるものとなないものがあります。乳腺の広がりというものあって、これはマンモグラフィという機械が進んでいたから、私小さいものも発見できました。3つもあったので、この世の終わりかと思いましたが、これもまたイメージが先行していますね。間違えた考え。こういうのも言っていかなければいけないなと思います。

■中川座長 ありがとうございます。

では、若尾さん、お願いします。

若尾委員



■若尾委員 国立がんセンターの若尾と申します。

国立がんセンターといいますと、皆さん、まず築地にあります国立がんセンター中央病院を思い浮かべるとと思います。あるいは「がんを防ぐための12カ条」など、いろいろがんについて、基礎から臨床応用までの研究している研究所がよく知られているんですが、私は今回、こちらに書いてあります「がん対策情報センター」という組織から来ています。

こちらのがん対策情報センターといいますのは、2年前の平成18年10月に、国立がんセンターに新たにつくられた部署となっております。何をしているかといいますと、今まで病院が患者さんを一生懸命診ていた。研究所がいろいろ研究をしていた。ただ、自分たちでまずがんを治そうとか、がんを研究しようという立場だったんですけども、もっとがんセンターを日本全国に対して発信しなくてはいけない。日本全国のがんの医療をよくして、皆さんにがんについてよく知っていただくなくてはいけないということで、がん対策を進めるために、がん対策情報センターというものができました。

私はそこでセンター長補佐だけではなく、情報提供診療支援グループというところのグループ長をやっています。いろいろがんに関する情報を集めてきて、がんの正しい情報を今、つくっています。がんの情報をつくって、それを国民の方、あるいは患者さんに向けて発信するという仕事をさせていただいています。

ですから、国立がんセンターは、病院や研究所だけではなくて、情報センターがあつて、情報センターはいろいろ情報を出しているんだということを知っていただければと思います。

それと、がんにかかれ、患者さんになりますと、がんとはどんな病気だろう、がんを治すにはどうすればいいだろうということで、情報を一生懸命探される方が多いです。ところが、そうでない方は、自分のがんにはならないと。多くの方がそう思っておられます。ですから、がんに関する関心が非常に低いんです。我々も何とか、国民の皆さんにがんについて知っていただきたいと思っているんですが、患者さんはよく見てくださるんですけども、がんではない方は、余り情報について関心がない。そこを是非いろいろ、広告業界の方とか、保険の方とか、教育の方とかの御意見を伺いながら、国民の方にいかにがんの情報を伝えるかということを勉強させていただいて、それを明日からの情報提供の活動に生かしたいと思っています。

最後になりますけれども、私、中川先生と同じ放射線科医なんです。放射線といいましても、中川先生の放射線治療と診断という分野がありまして、私は診断の方なんですけど、一応医者なんですけれども、今は医者はありません。広告塔となって、いろいろ情報提供の活動をさせてい